

令和7年度3学期始業式 校長式辞

明けましておめでとうございます。2026年が始まりました。今年は午年(うまどし)で干支は丙午(ひのえうま)。60年周期の干支の中で43番目に位置し「情熱的で強い意志を持ちながらも、激しさや変化を伴う」といった意味合いを持つ年とされているようです。

60年ということになると、本校も今年創立60周年を迎えることになります。昭和42年に大島高校与論分校として設立された本校は、昭和46年に与論高等学校として独立します。それまで島外に出なければ受けられなかった高校教育を何とかして島の子どもたちに受けさせたいという島民の悲願が叶ったのです。それ以来今日に至るまで、本校は与論島の高校教育を支えてきました。そんな歴史の流れの中に皆さんがいる有り難さを忘れないでください。

2026年は和暦では令和8年ですが、平成に換算すると平成38年、昭和に換算すると昭和101年になります。昭和生まれの私にとっては昭和という時代が、もうずいぶん昔のもの、過去のものになってしまった印象があります。去年は野球の長嶋茂雄さん、サッカーの釜本邦茂さん、ゴルフの尾崎将司さんがこの世を去りました。日本のスポーツ界を牽引してきた方々の訃報は、一つの時代に幕が下ろされることをさらに強く印象づけます。

昭和から平成に元号が変わったとき、ちょうど私は大学生でした。国内ではバブル経済の絶頂期と、その後の崩壊の兆しが見え始めた年で、世界ではベルリンの壁崩壊や天安門事件、マルタ会談による米ソ冷戦構造の終結など、今考えると本当に激動の時代だったと思います。

平成から令和に変わった年は、消費税10%への引き上げ、ラグビーワールドカップでの日本代表の活躍、京都アニメーション放火殺人事件、台風19号による大規模災害、改正児童虐待防止法の成立、首里城の火災などを経て、その翌年コロナ禍に突入していくわけです。先ほど昭和から平成への時代の狭間を激動の時代と言いましたが、平成から令和の時代も社会に与えるインパクトという点では負けていません。

結局世の中では、日々様々な出来事が起こっており、それに対してどのように対応していくかが、それぞれの人々の生き方を決めるのだと思います。特に、これからの時代を創っていく皆さんのような若い世代の人たちは、予測困難な時代といわれている世の中に流されて右往左往するのではなく、しっかりと自分の中にぶれない軸を持ち、主体的に自分から時代を切り拓いていくようであればならない。私はそう思うのです。

そのぶれない軸をどう作ればいいのか。それは、「自分が何者であるかをしっかりと

認識すること」だと思います。自分がどのような地域に生まれ、どのような環境で育ち、どのような考え方を持つ人たちの中で生活をしてきたのかをしっかりと認識し、その結果作り上げられた自分に自信と誇りを持って世の中を生きていく。それが大切なのです。

このことは、私が日々「与論島だからできること、与論島でしかできないこと」にこだわって学校生活を送ってほしいと言っていることと全く一緒なのです。そうすることでほかの地域の高校生とは全く違う唯一無二の存在の皆さんが作り上げられるのです。与論島に存在する動植物・地質・文化・風習・伝統芸能などにもっと丁寧な視線を向け、それらが自分の考え方や生き方にどのように影響しているのかをしっかりと認識する。そして、他の地域との差別化を図り自分たちの独自性をより一層際立たせる。それができれば皆さんの存在価値は一気に高まります。

なぜこんな話を今しているのか。それは先月、中高合同講演会で与論にいらっしゃった東京大学の加藤泰浩先生も同じ趣旨のことを話されていたからです。

講演会の前日、私と猶木先生は、加藤先生と同行されていた事務局の青木さんをお連れして、ぐるっと一周軽く島の案内をしたのです。どんよりと曇って海の色もさえない日でしたが、それでもお二人はヨロブルーの海に歓声を上げ、打ち上げられた貝殻や珊瑚などを珍しそうに拾っていました。ハミゴの風葬場所を案内したときにも、興味津々で中をのぞき、初めて見る光景に驚きの声を上げていました。最後は琴平神社、地主神社、サザンクロスセンターにお連れし、与論島を一望しながら与論の自然や文化に触れていただきました。お二人とも様々なことに関心を持たれ、多くの質問をされましたが、与論生活の長い猶木先生が観光ガイド並みにテキパキと説明してくれて、与論に関する知識がまだ浅い私をしっかりとフォローしてくれました。

このときに加藤先生は、「与論島には珍しい題材がたくさんある。これらの題材をテーマに深掘りしていけば、推薦入試などで立派なアピールポイントになる。よく、科学オリンピックや数学オリンピックなどでの受賞歴をアピールする受験生もいるが、そんなことよりも、ほかの生徒が絶対に取り上げていない内容を自分独自の視点で探究してきた受験生の方が断然魅力的だ。東大の推薦入試でも教授たちがきっと興味を持つと思う。それができる与論島に住む生徒たちは本当に恵まれている」という趣旨のお話をされていました。

また、ご自身が浪人の1年間を除き、高校時代まで塾や予備校に通っていなかった加藤先生は、与論に大手予備校などがいない環境もいい条件だとおっしゃっていました。小さい頃から親に塾や予備校・家庭教師などにお金をかけてもらった子どもよりも、自分の頭で考えてきた子どもの方が大学で伸びるということです。こういう点も与論島が皆さんにとって恵まれた環境だということの裏付けです。これまで、自分たちがこんなにも恵まれた環境で生活しているということを感じたことはありませんか。

最後に、皆さんに詩を一つ送りたいと思います。

「虹の足」

吉野 弘

(本文省略)

60年周期で巡ってくる「情熱的で強い意志を持ちながらも、激しさや変化を伴う」とされる丙午(ひのえうま)の年に、ちょうど60周年を迎える本校に在籍している皆さんは強運の持ち主かもしれません。与論という地域に感謝と誇りを持ちながら、力強く成長への脱皮を繰り返す年にしてほしいと思います。以上で3学期始業式の式辞とします。